博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	川手　翔生
論　文　題　目	中越境界政権としての交阯太守士燮の研究

審査要旨

本論文は、後漢末期、嶺南全土を州域とする交州で、この地を事実上支配した士燮を研究対象とするものである。彼は交阯郡（現在のベトナム紅河流域）の一太守でありながら、嶺南に一族経営による自立した地方政権を築き、ベトナムの歴史においても特異な存在として知られている。すなわち、中国王朝からの独立後のベトナムでは、自国の英雄と尊崇され、「士王」として歴代君主の中に組み込まれ、或いは国家や村落の守護神として崇敬された。しかしこうした評価は、中国王朝に対する抵抗の中から独立を勝ち取ったとするベトナム人の民族的アイデンティティからすると、奇妙なことと言わなければならない。本論文はこの問題を、中国史からの士燮政権に対する実証分析と、ベトナムにおけるいわば士燮神話の受容過程を追う双方の視点から検討する。

全体は二部構成で、第一部では、文献史料と考古学の知見から導き出された士燮の「中越境界世界」統治の実態を明らかにし、第二部では、後代において士燮に付与された士燮像の形成と変遷過程を追跡している。

第一部「士氏政権の形成と展開」

第一章「士氏政権の成立と拡大」：士燮が交阯太守となり、さらに一族を太守に据えて四郡を掌握し、事実上の交州牧となる過程を分析する。士燮の嶺南支配の背景に関しては、その在地性などが推測されてきたが、本章ではこれを否定し、その合法的な支配権獲得の状況が指摘される。

第二章「南越の統治体制から見た士氏政権台頭の背景」：後漢政府が士燮に交州の支配権を与えた背景として、秦末～前漢初期、嶺南を支配した先行国家の南越の柔軟な統治体制に注目する。その南越が前漢に滅ぼされると、嶺南では統治体制の急激な変更に抵抗して長い混乱状態に陥る。そのため後漢政府は士燮に嶺南の支配権を与えて、士燮に以前の南越と同じような役割を期待し、士燮もそれに応えて秩序を回復した。そのため、現地社会では士燮政権を南越の後継者とみなすようになり、その見方をベトナム王朝も受容した、とする。

第三章「士氏政権の帰順と崩壊」：その後、嶺南支配を企図して南下した孫呉政権に対して、士燮は帰順し、その子士徽の代に士氏政権が滅ぼされると、その後の混乱によって疲弊した嶺南の「境界人」の間に士燮に対する懐古の情が生まれ、彼を「王」と呼ぶ土壌が醸成された、とする。

第二部「後代に形成された士燮像」

第四章「「南交学祖」評価の形成と展開」：中国側史料に士燮を「越俗を化し、咸な乂む（ベトナムの教化者）」とする評価（南交学祖）が現れ、ベトナム側でもこれを承けて正史『大越史記全書』に同じ評価が現れる。その背景には黎朝の聖宗期の儒教偏重がある。しかし、その後このような士燮評価は双方に変化が生じる。すなわち、中国側では「教化者」としての像は継承されず、士燮の出生地である蒼梧という一地域の知恵者という評価になってゆく。ベトナムにおいても、西山朝期の呉時仕は『大越史記全書』に大幅な改訂を加えて「南交学祖」評価を否定し、士燮を歴代君主に列する評価も否定した。その後もこのような否定的評価は継承されるが、文学作品や村落教育に使用された教科書では「南交学祖」評価は根強く残った。その後、クオック・グー（ローマ字表記法）が国字として普及し、漢文教育が廃れると、士燮は教科書からも姿を消してゆく、とする。

第五章「「士王」評価の形成と展開」：士燮はベトナムで「教化者」と評価される前に、ベトナム人に「士王」と呼ばれていた。本章はこの「士王」の発生と展開を検討する。士燮を「士王」と呼ぶ

氏名　川手 翔生

ことはベトナムの小説集などに見えるが、その出典として中国側の文献、すなわち六朝時代の『神仙伝』と『異苑』を挙げる。これらのことから、ベトナム北部が中国王朝領だったいわゆる「北属期」に、民間で生まれた英雄としての士燮像に、「教化者」という中国由来の評価が重なって、ベトナム固有の「士王」評価が生まれたとする。

第六章「ベトナム・延応寺の仏教信仰に見える士燮像」：このような「士王」が登場するベトナムの説話の中には、仏教に関するものが注目される。延応寺に伝わる「士王」故事では、本尊の「法雲仏」造像の経緯を伝える部分（「法雲仏」説話）に、「士王」は「法雲仏」造像と延応寺信仰の立役者として登場する。しかしその原形をなすのは「蛮娘伝」であり、それは元々六朝期において漢人によって作られたものである。「法雲仏」説話ではこれを変形して「蛮娘伝」には登場していなかった「士王」を登場させ、士燮の存在を延応寺の「法雲仏」信仰を権威づけるために利用した、とする。

終章では、全体を次のように総括する。初めて「中越境界」に政権を樹立した南越は、柔軟な間接統治体制によって当地に安定をもたらした。しかし南越が漢に征服されると、画一的な直轄支配がおよび、この地域の居住民（境界人）の抵抗運動を招くことになる。それを制御できない後漢政府は、士燮にかつての南越の役割を期待した。しかし士燮の死後、士氏政権は解体し、再び抵抗運動が活発化する。そこで「境界人」は士燮への懐古情から彼を「王」とする英雄像を作り上げた。この士燮像は後に中越の間でそれぞれ別の方向に展開し、中国側では一地域の知恵者という評価となり、ベトナム側では民族の英雄としての方向へ進んだ。しかし、後にその反動からベトナムにおける士燮評価は低下し、消滅していった、とする。

本論文は、嶺南の士氏政権の前史としての南越と比較しながら、士氏政権の時代、その後の士燮評価の形成と変遷過程を、中越の正史のみならず、志怪小説や仏教故事など多種多様な文献史料を博捜しながら、自らの現地でのフィールド調査も加えて、中越相互の角度から検討しているところに大きな特徴がある。

当該地域に関する従来の研究は、中国史の側からベトナムに対する士燮の学術伝播の意義が強調され、或いはベトナム史における士氏政権の意義を強調するが、しかしそれは中国・ベトナムという「現代の国家の枠組みの中に過去の政治勢力を投影させたもの」と批判し、そこで対象地域を「中越境界」、そこに居住する人々を「境界人」と設定することで、いわば第三の視座からこの地域の歴史的意義を探ろうとしている。そのため審査会では、とくに「境界人」に関して質疑が交わされた。また、論文の性質上、正史以外に巷間に流布した志怪小説や仏教故事などを扱っているが、そのテキストに関わる問題が指摘された。それらを含めて残された課題もあるが、本論文が開拓した分野は高句麗史や渤海史などの研究分野においても寄与するものと思われ、審査委員会は博士学位の授与にふさわしい論文と判断した。

公開審査会開催日	2017年 9月 15日			
審査委員資格	所属機関名称･資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	文学学術院･教授	工藤 元男	中国古代史	博士(文学)早稲田大学
審査委員	文学学術院･教授	渡邉 義浩	中国思想史	文学博士、筑波大学
審査委員	文学学術院･教授	河野 貴美子	和漢比較文学	博士(文学)早稲田大学